

三國一夜物語

七

^ 13
3021
7



門へ 13
302F
巻 7

三國一夜物語卷之七

東都

曲亭主人著編

昭和九年七月二日購求

第九編

妓女節の死して夫より事

浪路ハ一旦の意氣地よりして浅間照行に伴て播州旭胸巖の隠宅に在
此れども彼ホ母子がひるる事多し邪ありけりよも思ひ辨て後身とその人
任せざりしと悔もすす支毎よりくむる幸多死を只よりさすつ三五箇月と
過せし一日照行ハ朝もたより室津ある平馬が許へ行て家よりひるらば
頃も雷無月のさらひひて降る降らざる時雨なる野山の黄葉ゆるぐ
早き散志を遅き粉をまとして眺殊さら栄ゆき憂を慰るよふるあまそ
ひとり端らう立出るる日頃との門辺を往來するひとりの尼ありけり

その年甲八五十二ちろく姿の花はすれても昔ゆるした面影むらさき。
世のトウのゆいも漆らるる白袴の布子と腰衣と纏ひ細身なる脚草
鞋穿あめて項掛う預陀袋少六字の名號と書字その傍播州
揖保西郡稲富莊信徳尼と記つ鉦うち鳴し念佛高き唱て北へ
過つ南へ歸るる券縁のにおに彼此と修行するをんぬ珠勝さ浪路ハ
絶ど一掴の米を進らせ暑く寒くも問うをんぬこの日彼信徳尼ニ戈
なりのる稚児と背負ひ浪路が侍立る椽のやりの走つて来りひき
あめ見只今よくねづりて侍らが負ひたる腕いともえがテ驚きあやう
抱きあつてのいまとりハ浪路ハとらを得く抱きあひてこれと見たり此
ある疱瘡病バとそ菘蔞の預巾と被せ顔ニニツ四七ツ玉蜀黍とあ

ちろくさうさう義孝業にまきハ親疎ハ抱きあひて可也死
物もまハ抱けるまもい却もまらふ共て信徳尼に對ひては身毎ハハか
小兒と携へひひりもまハ是ハ家老の孫やわらびをい信徳
はあまハ信徳尼答へといまう尼ハ親屬ハ或ハ死せ或ハ往方多るりて
世も人も捨らまてこれハ憂とらめ碓もつね尼ハありて侍らたを
孫とのり死すまものらねあつたに只今城山と號ままハ一ツの狼の思を引
合て墓地ハ馳走のうぞ身と殺して人を救ふ元より佛の誓願より迎
捨つるこのあまハ背向るも辟逃まびゆく死路ハ立ちかたり口ハ佛
菩薩の御名を唱へつ持る念珠を投つけし諸佛の衛護やあま
んこの見の運命やつらりけん狼ハこまて驚きさて稚児と地上捨る

雄おとこの阪さかを越こて去さる。八やち見みハ仰あがりききし。何なにと。いひし。汗あせに。
 さらひのしき。死しのつるうと。うま。一ひとと。は。袖そでを。あげて。熱あつ視しり。被かへる衣きぬ。
 の厚あつまの。益えきま。歎なげふ。衝つらう。と。り。と。も。膚かわへ。牙きばの。あ。と。ぎ。う。着つき。
 く。ぎ。ま。ら。む。敷敷く。ち。親おやの。む。と。ま。と。と。ま。ひ。う。ち。を。さ。ま。や。肩かた來あ
 ぬ。ま。ど。又また狼おこづの。出いる。う。の。や。と。怖こわま。ご。ら。て。只ただ願ねがと。走あつ。て。と。ま。む。ハ
 事ことの。つ。こ。ま。し。う。人ひと親おやハ。由よし緒おある。人ひとの。落おれ。魂たまを。ら。う。と。お。か。し。う。て。二ふたツ。三みつ被かせ
 たる。針はり目め衣ぬいも。紫むらさの。灰あむ。と。こ。ま。こ。紅べにの。う。つ。り。と。ま。ま。こ。る。さ。か。ち。あ。り。裂き
 ぜ。と。焚とつ。と。合あせ。と。作つくら。る。ま。ど。と。ま。ま。練ね練ねの。こ。ま。ひ。ろ。り。の。こ。の。あ。の。こ
 づ。み。子こを。失うひ。つ。る。の。の。の。の。の。ハ。使つかる。ら。ず。や。と。浪なみ路ぢハ。審つらし
 縁のり由よしと。作つくら。る。風ふう同どうハ。侍ざむらいら。ね。ご。の。見み十じ死しの中なかへ。一ひと生なまを。得えたり。ハ。

四よ身みが。行ゆの。尊たうお。よ。う。て。神かみ佛ぶつも。カ。と。加かえ。る。あ。う。を。宣のたまへ。と。く。衣きぬの。摸も樣やう
 と。い。ふ。に。舊ふるく。と。と。い。ども。賤せの子こが。被かへ。死しの。あ。む。ら。し。ら。と。回ま答たし。つ。
 被かへ。る。衣きぬを。う。ち。う。く。く。す。る。に。靴くつの。裾すそは。五ご寸すんを。ら。う。縹せう纒ぜんの。裂きれ。を。纏まと
 合あせ。と。圍まり。美み山やま形かたの。紋い。見みす。る。に。ち。あ。ま。の。あ。り。な。り。浪なみ路ぢと。れ。と。ま。え。う。う。を。
 衣きぬハ。沈しづ吟ぎんを。て。い。ま。う。す。と。推おし思しの。守まもり。袋ふくろを。入いれ。臍へし帶おビを。細こく。の。の。あ。う。は。ひ。り。
 の。さ。る。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。ハ。信しん德とく尼に點てん。と。い。ふ。
 も。少すくな。く。あ。の。の。あ。ま。ら。び。披ひらぐ。ア。と。い。ひ。つ。腰こしを。さ。か。り。る。は。ま。の。口くちを。た。て。
 う。ち。裏うらの。物ものを。う。ち。さ。せ。富とみ士し浅あ間まの。神かみ号ごう羽う衣い明めい神しんの。守まもり。札ふしの。り。が。ま。す。
 駿うま河がは。鎮ちんの。ら。ず。神かみを。ま。は。その。國くにの。入いり。を。あ。り。と。又また攝しやく別べつ佳け吉きち四し社しゃの。守まもり
 札ふしの。の。こ。ま。し。し。事ことの。證あかしと。さ。る。と。あ。ら。す。と。さ。る。不ふ步ふ披ひて。う。の。摺すも。経けいと。

果して一果の産毛胎帯ありて上り明德三年壬申八月甲戌日生る。其
 州浅澤の住人富士太郎知一が兒子敷太郎と記し、且浪路ハ何
 驚て思ふが抱き、母もあつて、見ハ覺て泣出すを由り揚くする間、
 又すやくと睡る時、信徳尼のひき、今胎帯の書付をらんれば、その思の
 父母ハ津の國の人とあり、さよ彼地より狼がとるぐと、去るがよ、
 今ハこの國へ移り住り、或ハ旅路をたて、合去らむつるを、
 且バ尼ハこの地の歌泊ハ、さうり、空屋店とて、普く索ねて、
 の國中も、書付のく、且と書字山ハ三十三度、金詣り、死ハ願ありと、
 既三十三度の詣り、聖のその頃ハ又登山して、この願を果さむと思
 ひて、よその思ハ、撃きて後、見もい、を、
 尼ハ、手うけ、且を情ある人と

見まらせ、はるる、ゆ、
 育ん、
 外、
 の、
 門、
 の、



三十一

問てはまどろた女子の答を蓋ひて答ふるの回答て明白にも物くくらふ事
 かをこの燈籠ゆへその人のこゝろを考ふるのみまてそのいふことろはねど時
 信徳尼彼の燈籠を指してのまう尼近曾書字法花西坐の山ゆて説
 法と聽聞せし燈火を供養する人その功德の勝るもの法華經も
 見えて一香燈を供養すも佛道を成と説く又華嚴經も燈ハ能
 闇を破るを以て菩提の心支煩悩の闇を破るに喩ふ譬ハ一燈と闇室に
 入るが如し百千年の暗も悉く破盡す菩提心の燈も亦復如是衆生
 の心室に入るとは百千万億不可説劫の諸業煩惱障の闇障も咸
 除盡すと説くものこゝろ于て諸經要集も阿舍王舍衛城の祇園に
 至つて万燈を燃す會女一燈を燃す猶その功德ハ勝るとやよりて今

この燈籠の功德を考ふる長者の万燈も勝るべしさ夜山を越るのいふこと
 と郷導するゆへ路を迷ふといふまゝ暮より曉もあらず十方世界を照す
 るのいふことと切徳を考ふる善根ある家も善いの子を托けともいふて固
 辭ゆへにまどろた女子を始に信徳尼といふ人も高燈籠ハ敵を防ぐ
 暗号ともおもはるるが如く狼の口より救ひて又虎の頭へ陥らるゝ兎の命の老まハ
 実風前の燈この時印原ハ一室にて一五二十燈籠を障子やさら引明て立出
 つ信徳尼を對ひていふゆへ今このいふことろを考ふるも信徳尼のいふことろ
 子あるひてこの親を考ふるも素ねぬをせんと言ハす人ハ大なる慈悲なりといふ
 意まてゆへに此の方をも合せ進らせして便をも考ふるべからず浪路を盡
 瘡病の推児を端ちくる死て山風も當のひとまてつみ乳汁を煮る

けんごうに肥てまゝも男児とてあつた初孫のらああらたするら子ハ折
 家あつたな婆も願つたらまゝが易くあつて書子山へも詣又その見の
 親まよとく素ねりのゆひのつとま天伴ひのるどいと信くしくはあつた信
 徳尼ハ大々然びまのらたまもあつた子へよく勤めてよといひおたて
 帰る尼もあつたつらるる残とやぞとてえ推見あつたび鴛鴦一を全向の
 出を乳やわらうまのらんぞさるくまらて卯原ハ見を抱り套房
 のうへ推ひあひ信徳尼ハ鉦うちきりて湊のうへゆりくるうくて浪路ハ
 その夜推見を勤ると終夜日睡次の日もあつても照行いまうらまね
 ハ卯原ハ浪路に對してのまう照行ハ室へあつて生平ヨ三日も四日もくつと
 るたふらへまもあつたつらま女子のまうこの家ハ推見のものを願つたも鳴呼

かまひ野あつたこと家ヨ只一人の奴隷ハのびのりのものも親里へ退つ
 たまが人得たへいひ遣すとよふもまらうまらうら彼野のあつて照行を
 解ひまへて継その見の親もあつた索ねまらうのゆりまらうまらうら
 おたのまもあつたえおたてのまらうらまらうらまらうらまらうらまらうら
 ままた。又推見の父母とや索ねまらうえ昨のまらうと音づまらうまらう
 身はまらうこの見のまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
 女の翠帳紅圍の重く媚と生平まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
 らぬ乳汁といひの露もまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
 よもまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
 出よまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう

音と鳴る吉鳥の冬の取もく向暮る。浩野は卯原の室津より立ち入
 つもよりの暗しとひつゝ裡への浪路と透つゝと只一人の見せしと
 まし日の暮るに火も点さず。まともひるた女子と罵る。浪路を低
 ちて。只今の子が睡りたるを驚き。ぞぞと
 す。ゆりも回答するを卯原のわろく。がまきう罵つまづ門の。高燈籠
 火と點して家の内にも平日より。燈火の敷をま。いと明く。ゆる砥石を
 剔骨尖刀とを椽類に携出せられた杖と巻あげて氷を。研らば
 浪路はうく怪しく其方と眺居る。卯原の尖刀を研らばと浪路は
 對ひたる室と痘瘡を控く病思ふ。呪と受。まばその見ても。口ひて
 得ま。そそく。將と。まの。を浪路は。ひひ。まけ。ち。く

抱きあるを卯原の猿臂と伸兒の腰引相ひそのまを丁とろた除き。噫と泣
 出す。雅児よ。良路が胸の轟て走逃ん。足も戦慄て逃ま。をせん
 て。と。女は。浪路との。驚き。怖る。ひと。今雅児を呪して。せん
 り。の。尖刀との胸へ。突立る。まの。夏。の。い。ひ。る。鬼。を
 思ふ。が。照行。の。と。と。まの。ひ。て。ま。い。ん。の。の。い。ん。と
 疑ふ。まの。の。ま。の。子。の。来。つ。ま。告。り。た。を。ま。の。ま。其。見。し。と
 本。と。ま。の。ま。の。何。の。隠。さん。は。男。が。夫。の。世。々。四天王寺の樂人。ゆて。浅間左
 衛門。と。呼。び。ま。る。遺恨。點。止。が。く。い。ゆる。明徳三年二月廿五日の夜住
 士の樂人。富士右門。との。の。と。間。撃。に。今。ま。の。播。州。の。龍。住。と。い。ま。右。つ
 が。見。子。富。士。太。郎。の。父。の。仇。を。報。ん。る。諸。國。を。編。歴。し。て。近。曾。當。國。へ。來。り。ま。を

彼の母の夜目の目を安んずる。睡らず。多るにその推思の富士太郎が二子と
 即ちのくくを時帯に記しゆらひ。いふより彼をばこれぞ
 富士を欺引する究意の入質多る。こゝを圍りて斬く返敷たを
 ねとと思ひくく。真の室に到て照行の告つる。照行の。二葉多
 ね根と断れば谷と用るの悔ゆの殊さらそまぐ。長門のゆり。日或
 医師の物ぐ。七才未満の小児痘瘡の見點より十五日迄の間。その鮮
 血とぞ。陰乾す。如此の薬種を合せて飲ませ。髪毛忽地。白く。変じ。弱
 ます。さながら老る。如く。と語つ。一喜の。只一人の富士を。怖ま。せ。り。返
 斯での。人。ま。こと。仕。宜。と。始。す。至。つ。て。大。く。こ。ま。を。誤。く。ゆ。れ。が。室。町。殿。へ
 の。ゆ。を。と。悼。て。助。ん。と。す。る。諸。候。も。ゆ。ら。り。幸。多。う。も。彼。敵。太。郎。が。鮮。血。を

用て件の奇薬を調合。口を立地。形を。変。て。後。身。く。仕。宜。す。べ。し。又
 富士太郎が富國の。夏。よく。彼。ま。ご。め。を。い。ま。ま。に。彼。を。撃。ん。ひ。つ。易。し
 どの。任。せ。ら。ぬ。殺。生。す。る。と。り。い。身。が。あ。ら。も。夫。の。立。身。後。の。ま。ま。に。筋。を
 誘。その。思。と。と。と。へ。く。と。と。た。ゆ。ら。り。剔。骨。尖。刀。に。て。招。き。い。つ。が。身
 を。切。ら。く。思。ひ。ゆ。浪。路。ハ。決。雨。の。お。ま。く。い。ん。と。す。ま。と。胸。を。さ。り。抱。締。る
 心。と。声。と。そ。泣。稚。児。の。楯。を。さ。る。袖。ま。統。の。ま。り。が。且。て。い。や。う。日。夫。ハ
 兎。ま。ま。角。れ。年。老。の。入。口。を。い。は。い。げ。る。も。ゆる。る。す。て。人。を。殺。す。の。ハ
 又。殺。さ。る。ま。理。を。り。彼。も。一。人。我。も。一。人。潔。く。名。告。ゆ。ひ。て。管。雄。を。変。せ。よ。と。い
 宜。い。が。縦。敵。の。思。ひ。も。あ。ま。ま。と。東。西。に。あ。ま。ら。ぬ。の。く。鮮。血。と。ぞ。り。て。薬。を。一
 形。と。変。し。世。の。人。を。欺。く。身。の。安。樂。を。圖。ら。せ。と。ま。の。い。ま。う。ね。も。腹。ま。は。

たりや。多男の死するも。その見を。殺さず。その口説つ。よ。泣。巴。卯原の
 忽地眼を瞶し。身を浪路。舟人の妻。子。その夫と姑と。泡。その言。敵の
 甘。よ。方。人。す。入。多。知。う。け。て。多。を。ま。ら。ず。実。は。推。行。女。の。こ。ろ。裡。け。ゆ。ん。死
 の。へ。め。ら。ざ。り。一。と。声。を。り。そ。の。ひ。微。せ。ば。浪。路。の。う。く。恨。を。含。て。う。死
 川。行。の。ま。ま。も。清。き。身。の。ま。づ。と。道。を。守。の。と。操。を。立。悪。と。諫。て。善。し
 帰。す。そ。を。憎。し。と。お。ど。ろ。く。ま。づ。こ。ろ。う。く。ら。う。ら。う。ら。う。け。て。殺。し。の。と。の。せ。も
 又。す。卯。原。の。つ。と。身。を。起。し。推。見。を。と。走。り。う。る。を。ひ。お。ん。た。は。つ。た。り。
 女。遊。子。と。と。と。遊。ま。ら。る。浪。路。が。胸。を。楚。と。把。雌。の。尖。刀。投。す。て。推。見。を
 撞。つ。と。彼。所。の。椽。に。撲。地。と。投。ま。り。お。う。と。聞。き。て。小。空。を。へ。浪。路。を。撞。と。蹴
 こ。ま。は。く。戸。を。引。建。ま。り。裡。より。も。明。ん。く。と。回。ゆ。を。掃。枝。抜。て。鴨。居。際。へ

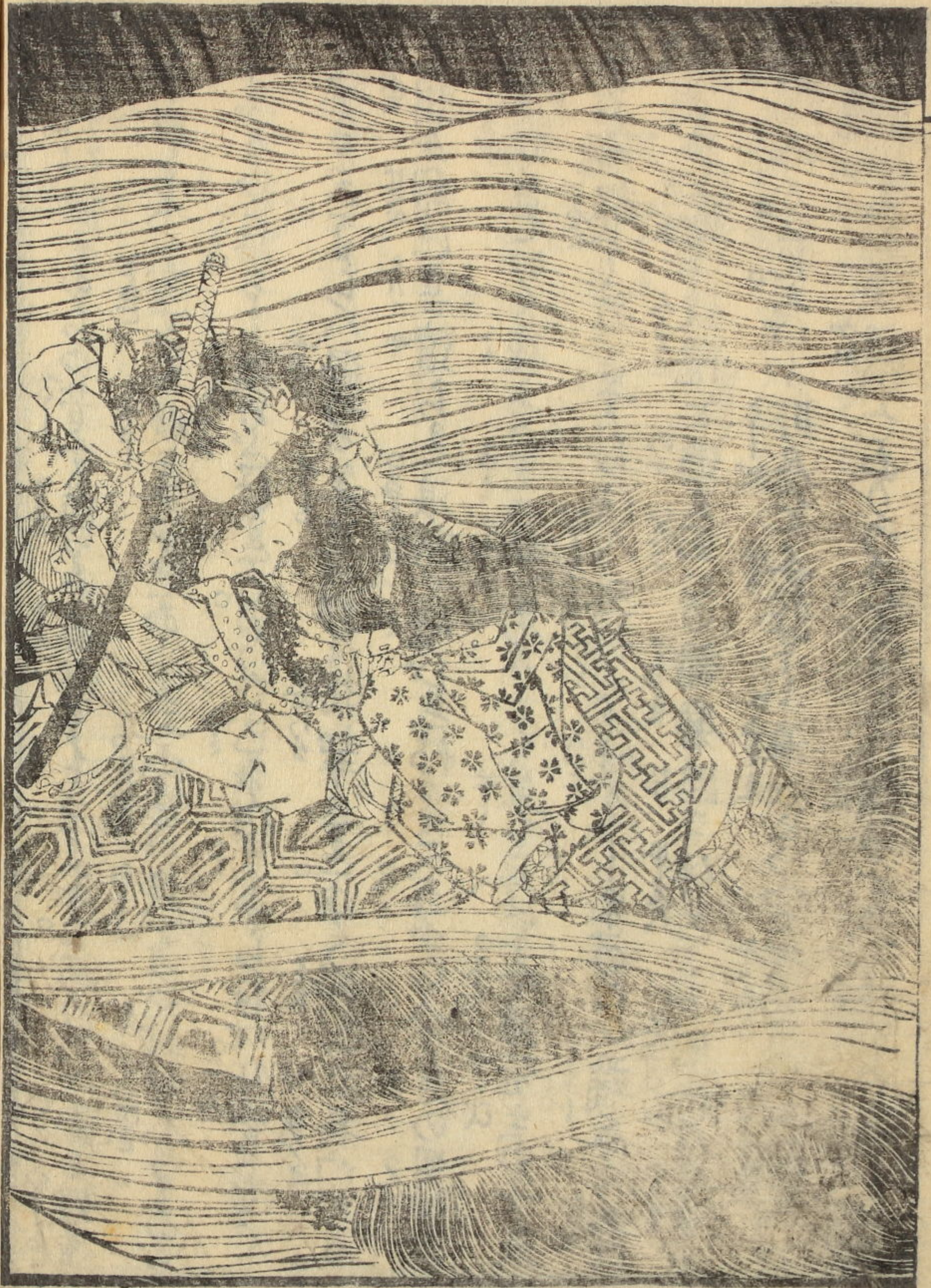
ぐ。を。挿。し。即。坐。の。尻。鎖。一。息。吻。と。九。十。九。髪。を。ら。り。と。四。方。へ。う。乱。す。雪
 の。押。や。氷。の。地。獄。彼。二。途。河。の。棄。衣。婆。が。呵。嘖。も。く。く。中。を。ん。え。り。多。斯
 て。卯。原。の。尖。刀。を。拾。ひ。り。再。び。椽。に。立。出。て。哭。叫。ぶ。推。見。を。仰。る。と。引。か。へ
 つ。既。に。胸。先。へ。突。く。そ。ん。ず。う。る。折。り。も。富。士。太。郎。夫。婦。ハ。その。夜。より。黒。崎。の
 船。中。で。明。る。を。遅。し。を。待。ま。び。つ。次。の。日。の。彼。誰。時。より。立。出。て。敷。太。郎。を
 索。ね。り。と。更。す。そ。の。往。方。を。ま。す。日。も。た。徒。ら。暮。ま。り。これ。が。世。の。死
 う。の。を。思。ひ。ま。え。又。元。の。浦。曲。に。立。く。ら。ん。そ。鳩。月。山。巔。の。村。麓。を。う。り。よ。
 山。蔭。の。ぐ。ま。り。へ。る。所。ふ。一。軒。の。白。屋。ゆ。り。て。門。の。高。燈。籠。掲。出。し。裡。へ
 推。見。の。泣。声。せ。し。む。か。て。接。子。を。ま。く。は。つ。け。て。夫。に。對。ひ。今。彼。所。あ。て。泣
 児。の。声。と。ゆ。く。と。う。く。敷。太。郎。が。声。音。に。似。ま。け。り。門。へ。回。を。ま。ま。り。ハ。

富士太郎ふじたろう魚腹うぶく実みゆも彼泣声かのなみこゑハ仮初かりはつゆもびづるよもゆめえゆめえ内うち有あり先まへ裡うち入いりて外そとからその光景あきさまをうんて来きの命いのちすまへすまへ接子せしこをううて走はしり着つて諸折戸もろせりとをとるとくくととままづづに誰たれとと答こたへるるものものももろろくく戸とハ押おかかまますすふゆ田の庭に過とりて坐まさまののううふふ歩あつつままりり照行ていこうの母ははの卯原うしはら敵太郎たかたろうと膝ひざを引布ひきぬたて十日じゅうにちあまりの月つきよりよりももろろ先まへ是こゝ大おほ刀やいばををの目め今いま突つ殺ころんととあありり全ぜんくく接子せしこ吐つ嗟なげととううちち駿うまささ支し急いそぎぎままててととと夫おとこ又また告つるるももももろろくく懐なつか劍けん引ひ抜ひて走はしつつろろるるを卯原うしはらも接子せしこと見みて敵太郎たかたろうを打捨うちすてたた忽たちまち地ち庭に跳はつつて出で彼かの尖とが刀やいばととありりままりりつつて逆さかへさか戦いくさとと二ふた三さんあありりててななめめくく接子せしこ懐なつか劍けんととあありり性しやうどどろろを撲地うちぢとと跪ひざま倒たふしし起たちた立たちち黒くろ髪かみととななたた捲まききて眼めを睜めきき声こゑ高たかききるる馬うまののわわらら

汝おまえハ浅あ沢さわぬぬてををりりくく會あいあひひ富と士しが妻つまの櫻子さくらこふふととそそのの稚兒ちどりとと四よ人にんして汝おまえハ夫婦ふうふと引ひととせせんととててままのの入いりり待まちりりびびららりり汝おまえハ一人ひとりゆゆててふふももああららずず富と士し太た郎らうハハららづづちちああるるももろろくくとと告つぐぐとといいひひままりりて頭かぶと土つちの摺すりつつけけくく繼ついで責せまりり櫻子さくらこが怒いかりりの淚なみだ地ちを潤うるしし反かへりり又またまんまんゆゆもも平へい弱じやく女によののせせんんままももああくく足あしととええんんばば卯原うしはらのううちちと冷ひや笑わらひひよよろろくくいいひひままりりゆゆめめええんんとといいふふとと来きりりののををままけけるるもも歸かへりりれれどど別わか骨ほね尖とがりりの相あ伴ばんとといいふふののひひつつ又またををあありり揚あげげるる折せりりもも飛と来とるる半はん裏うら劍けんハ膽だん三さん枚まい打うちちぬぬきき叫あいい苦く一ひと声こゑ仰あげげるる卯原うしはらハハししままをを息いき絶たええりりしし嬰あや子こをを身みにに起たちち上あがありり禿かぶ頭づかは走はりりよよりりままりり敵たか太た郎らうを接抱せきぶて勲いさなめめ目めを配くわりり心こゝろののままりりととううけけるる富と士し太た郎らうハ半裏劍はんうらけんを卯原うしはらをを斬きりり

ちりて生垣押破りし身をひらけ。椽の閃りと飛揚りのふ照行のぢぢぬぞ。
 眼前老母と撃れまゝ。逃ぐるるやある出よと叫りてつくと歩よ。
 小坐舖の胖響音して浅間もつら。歸りけん隔の杉戸を音する程より下。
 突出と鎗の蛭巻の捆と思ふまふ富士太郎の仇人を前ふ引よせて片手。
 抜り刀の鏝際衝とむ彼方ふ魂銷声蹴放を秋戸掻遣棄首を取んと。
 立ちて刃れがふ思議や刺甲の仇人照行のあざをいしての婢妍の一人の女子。
 短き鎗と手ふ持まゝ。血の塗まを臥れれば何人ぞと驚問の女子のいとも苦。
 びかてのふ兄う小雪と見よまれのひら。とのひかやをくくろり。駭き熟視。
 是れ往ゆる年生別と妹あり鳴平割輕。いつふせん思ひがけごととむらふ。
 疑ひ惑ふ櫻子も連忙く走り来り仇人照行が身ふるつて家兄は撃れ。

むつら仔細ぞゆらめ苦す語ると惑ひとまらしてよ。とりのひつ。勲る嫂も。
 ちりてゆらめ女子と親をいそいでゆらめ。小雪の涙とを拭ひ人よゆらめ。
 ぬらぶうへと語るも後や。けいまでいりて己まん夏まらねば。ひままなく。
 やすこととよら。過つる年五四郎。拐挈とま。ゆく路のく。長門なる。
 赤間が關に書遣ら。浪路と。はびま。はるる。さへ。から。る。男の甲斐な。
 さと歎はそい。夜ある里の空る。う。く。年と。控て。今茲。弥生のすま。
 るりえん。都が。この。ま。すら。ひ。人。照行。ど。り。ま。ま。の。こ。う。端。ま。く。ま。ひ。
 思ひま。で。遂。て。妓院。と。逃。出。知。ら。の。播磨。路。の。伴。ま。が。照行。の。赤間。が。
 関。と。奔。る。を。死。志。が。一。卧房。と。よ。に。せ。し。浪江。と。い。る。傍。草。の。遊。行。女。を。
 刺殺。し。ま。ら。ず。顔。と。め。り。つ。つ。と。い。ら。の。後。よ。こ。ま。と。猜。し。て。ま。ら。く。ひ。ま。



憎まらば物でも今入るべし。とて、何のあはれなくも、ゆるさずも、從
居る。照行が母子の、さきより、悉く道ゆわらぬ。とて、いづく、陳ましく
あつ。折る。まの。入。相。富。る。信。徳。を。以。尼。法。師。城。山。と。て。狼。を。咬。ま。ん。と
せ。推。見。と。う。つ。つ。と。救。ひ。し。り。と。て。家。の。伴。ひ。ま。つ。この。見。の。親。を。妻。と
ま。で。き。り。関。つ。と。あ。い。ま。と。托。と。使。え。り。守。袋。の。胎。帯。ゆ。り。と。名。字。を。夫
と。ま。す。一。く。ぶ。ひ。よ。う。ら。ぬ。姑。の。こ。の。甥。の。を。告。も。せ。ら。ま。す。兄。の。六。駿。河
より。津。國。へ。う。つ。つ。住。ら。ぬ。ゆ。り。ま。で。ま。す。ら。ひ。て。見。を。失。ひ。ひ。ん。ん。父。母。の
見。と。も。ひ。ひ。の。ま。ま。と。思。ふ。ま。ま。し。ま。ま。推。見。の。痘。瘡。病。く。乳。を。放。ま
母。と。慕。り。て。声。と。ど。の。泣。く。ら。う。と。う。つ。悲。し。さ。の。三。千。世。界。の。眞。苦。も。み
ぞ。是。ゆ。の。甥。を。ま。ま。と。ま。ま。と。入。り。ぬ。り。う。う。な。り。て。推。見。の。鮮。血。を。採。り。て。

妙。葉。の。ゆ。ら。ら。る。ま。姑。の。息。と。一。罵。る。お。肝。つ。か。ま。と。その。故。ゆ。ゆ。と。骨。を。バ
あ。く。の。夏。の。と。と。夫。の。本。名。舊。悪。を。ま。と。め。て。明。す。悪。因。縁。を。ぞ。ら。た。呆。ま。と。く
せん。す。ま。る。死。父。上。の。忌。日。ま。あ。ら。ぶ。る。の。ま。ら。浅。ま。や。見。の。仇。人。の。妻。と。り。
一。人。の。甥。を。殺。さ。せ。て。形。を。変。り。世。を。貪。り。人。を。誑。る。妙。葉。の。す。す。を。看。く。仇
人。も。甥。も。名。告。る。名。告。ら。ま。ね。ば。死。ん。と。も。ひ。定。め。つ。せ。り。甥。を。救。ん。と
外。多。ら。ら。ぬ。ゆ。り。ひ。る。た。女。子。の。と。ま。ま。う。ら。ひ。す。この。小。坐。を。へ。蹴。あ。ま。れ。て。
出。る。ゆ。ら。ら。ぬ。尾。鎖。の。胸。の。板。戸。も。毀。ま。し。と。う。つ。ひ。の。か。る。せ。ま。く。その。ま。ま
休。ま。對。し。る。お。兄。の。夫。婦。幸。に。索。ね。來。の。ひ。て。見。を。救。ひ。て。仇。人。の。老。母。を。即
坐。り。斃。せ。る。ひ。一。且。の。危。急。を。脱。る。た。似。し。ま。ま。長。き。う。り。て。六。夫。の。從
ふ。婦。の。道。と。り。と。り。バ。兄。の。姑。の。仇。人。も。又。切。て。六。母。の。從。の。子。の。道。と。り。

の父の仇人ありとの為一ツと王掃等うらうらに分んやうまひまづ一ひ
 兄に及びて怒りて夫よりうらうら外にわらうと心定鎗架の鎗と把杉
 戸を隔て突出すもの誤してこゝろに傷つけんをいそひ思ひこゝろ
 づりつと語るも息の下きりゆり接子に味氣多死小雲がうを破毎に真愛を我
 二方へ右門が柱死五四郎がうらうら死地は陥りて去来しつとそとと
 るく語る富士太郎も両隻の眼をまぶざ死父を浅間へ移すより
 思ひを焦し身と棄て今をうらうらと照行が隠家へ索ねまのま
 けも仇人の面とみず却て妹を殺すものこゝろから面目をこゝろにつけて
 も痛志死の母の心よの自害をの今殺すも小雲とんふ死るの後の
 うらうらとを遺言の中ばえのひそのうらうらひ多く見おそひて死跡をも

吊進らせびりむらり嬉しき受のんよこま環會うらうら兄が死た妹も
 非命の殺す悪業の過世の報をらんもその声小雲が耳を入らんか
 色散る顔を上りお母もこの世の在るや宣はする叫意と一声引
 息のゆるくも緯断しつ接子に顛ひ声と惜まふ泣をわつと富士太
 郎のいこひとを勵しつ猛然とまわりの照行家のわらうらも程遠ハ
 よもゆりその行先と驅索め本望遂ん誘ふと妻子と抜くゆり
 走つと下る庭面多る卯原ハとら死をらんん身と春蟲して起わりの日とら
 求食て涼入る親子三人の旅馬目今思ひをらんんよとゆりて彼尖刀
 を引提つとゆりたから椽頬の柱に懸し高燈籠の索と丁切断バ
 せろと滅くる燈火の闇に閃く富士太郎が刀の下に卯原が首ハ落て鮮血

塗を走り浩野は山前山後四面八方は喊声發すと目録太鼓の音途々御音
 てやこの野へちろくめど富士太郎耳を側ぐそ庭あふりくる松が枝は
 登りそりまふりしく実駢しき蕉火うみさそりらの高燈籠の火と滅と
 めて暗号と一平馬が黨助太刀七の目と替んとすをわや縦數百人そ
 ぞの圍を雙音敵ハ照行一人えらそおに替りて切死せんとのひもあへ
 お松が枝より飛下りて南とさそと走ひりば様子も後とを引つて
 ぞ走りたる。

三國一夜物語卷之七終



